調査コラム～史料調査の現場から　第９回

新聞に見る松江の流行性感冒（スペイン風邪）の様相

新型コロナウイルス感染症は、令和２年（2020）１月に国内で最初の患者発生が報告されてから、すでに１年以上が経過した。その後第２波、第３波と大きな波が幾度も訪れ、終息の兆しは見えない。2021 年４月現在はついに第４波到来と言われ、日々感染者数が増え続けている。

松江市内においても、2020 年４月の緊急事態宣言の発出や新しい生活様式の導入により市民生活は様々な影響を受け、わずか一年で世の中は大きく変化した。

新型コロナウイルス感染症とよく比較されるのが、およそ 100 年前、第一次世界大戦中に流行したスペイン風邪である。スペイン風邪は、大正７年（1918）から大正 10 年（1920）の間に複数回流行を繰り返し、世界中で少なくとも 4000 万人以上もの人の命を奪ったとされる。「スペイン風邪」と名付けられているものの、スペインが最初の発生地というわけではなく、当時第一次大戦中で戦時報道管制の枠外だった中立国のスペインから情報が世界に発信されたことにより「スペイン風邪（スパニッシュ・インフルエンザとも）」と名付けられた（注 1）。おおむね 1918 年９月末から 10 月初頭にかけて船舶を通じ日本に上陸したといわれ、全国で猛威を振るった。

松江におけるスペイン風邪流行の影響は如何なるものであったのだろうか。当時の地元新聞「山陰新聞」の記事からその様相を見てみたい。

１．松江市内における流行の始まり

「山陰新聞」に最初にスペイン風邪の記事が出たのは大正７年 10 月 27 日である。紙面ではこの風邪を「流行性感冒」「悪性感冒」などと称している。この頃には既に山陰地域でも患者が発生しており、蔓延の兆しありと報じるとともに、アメリカで「スペイン感冒」と呼ばれていることを伝える。

【記事１（以下、資料の該当番号記事参照）】

そのわずか３日後、一変して流行性感冒は大きく取り上げられている。松江市内での流行が始まったと見られ、島根県庁では農務課、商工課などの職員が欠勤し、度量衡器の検定が休止する事態となっている。松江郵便局では欠勤者が 30 名となり、郵便物の集配が二進も三進もいかない状況になった。松江駅では列車の運転にも支障が出る事態に追い込まれている。市内小学校の欠席児童数はこの時点で既に 1,162 名に達しており、中等学校も含め続々と休校が決定している【記事２】。

２．流行性感冒、猖獗（しょうけつ）を極める

11 月に入ると、流行感冒に関する記事は連日掲載され、島根県内での感染が急速に拡大していく様子がうかがえる。松江市内でも小中学校や県立学校の休校が長引いている【記事３】。11 月３日の記事には「松江警察管内に於ける流行感冒」として市内における蔓延の様子を伝えている。【記事４】。

●潮の如き蔓延の勢
―松江警察管内に於ける流行感冒―
▼松江市内
▽郡部惨狀
●學校引續休校
●西廻汽船休航
青島便

【写真１】「山陰新聞」記事、大正７年 11 月３日

なるべく外出を避け、商店も閉め切ってしまう様子はまさに現代の緊急事態宣言下のような様相と言える。同日の記事に「郡部惨状」として各地の蔓延状況も詳細に報じている【記事５】。また市民生活にとって重要な汽船が続々と休業に追い込まれた【記事６】。

11 月４日には島根県警察部長が各郡市長及び各警察署長に宛て、流行性感冒の予防注意とする通牒を発している。これを見ると、「群集しないこと」、「接触を避けること」、「採光・換気をすること」など、新型コロナウイルス感染症予防のいわゆる「3 つの密を避ける」と通じる内容や、うがいの徹底、通常の風邪に罹らないよう注意する事など、現在と全く同じ予防法が確立されていたことがうかがえる【記事６】。

11 月６日の記事では、ついに松江市内の人口の６割にも達する２万４千人が感染したと報じている【記事８】。山陰新聞社自身も社内での患者多数発生のため、編集・印刷に支障をきたすようになり、【記事９】のような記事減少のお知らせを出している。

大正７年の松江市内における死亡者数はスペイン風邪の影響で急増した。11 月５日には火葬場が狭隘するほどであることを伝え【記事 7】、11 月８日の記事では、10 月・11 月の死亡者数は昨年の２~3 倍に増加していると報じている【記事 10】。その後も死亡者数増加は続き【記事 11】、こうした様子は松江市の公文書「大正７年事務報告」（松江市所蔵）にも見ることができる。この年の「市内死亡者月別表」を見ると、10 月に 90 人、11 月に 244 人、12 月に 82 人と続いており、「本年は十月末より十一月に亘り流行性感冒猖獗を極めし為め死亡者多かりし」と説明されている。

３．第１波の終息と小学校の罹患率に見る流行の様相

11 月 23 日には流行性感冒が終息に向かっている様子を伝えるとともに、比較的罹病者の多かった市内小学校におけるスペイン風邪の罹患者（生徒・教員）数を報じている【記事 14】。整理すると次のようになる。

松江市内各小学校におけるスペイン風邪罹患状況

種別	項目	市内総数	母衣小	北堀小	内中原小	白潟小	雑賀小
生徒	生徒数	4,610	1,265	534	776	889	1,146
	罹病者数	3,869	1,134	390	699	761	885
	（未治患者数）	343	57	42	44	37	62
	罹患率	84%	90%	73%	90%	86%	77%
教員	職員数	96	26	14	15	20	21
	罹病者数	67	19	10	13	16	9
	（未治患者数）	3	記載無	記載無	記載無	2	記載無
	罹患率	70%	73%	71%	87%	80%	43%

いずれの小学校でも生徒の罹患率は７割を超え、特に母衣小と内中原小では９割以上の生徒が罹患しているという、恐るべき状況にあったと言える。前述の 11 月６日の【記事８】で松江市内の人口の約６割が罹患したとあるが、特に子供たちの罹患が多かったことがうかがえる。

この後、12 月に入ると流行性感冒を取り扱った記事はぱったりとなくなる。11 月と比較すると驚くほどの変化である。山陰新聞の記事となるエリアにおいては、大正７年の流行性感冒のピークは 11 月であったとわかるが、わずかな期間にこれだけの被害を出したことを考えると、恐るべき感染力であったと言えるだろう。

４．続く大正８～９年の大流行

大正７年秋の流行の後、次にこの悪性感冒が松江を襲ったのは大正８年末~９年初頭であった。大正８年 11 月２日に簸川郡での流行が報じられたのを皮切りに、11 月 26 日には松江市内での患者発生を報じている【記事 15】。

12 月に入ると、流行を懸念して市役所からは内務所衛生局の出した「予防心得」を配布している【記事 16】。ここでは、予防法として

1. 病人又は病人らしい者、せきをする者には近寄らないこと
2. 人の集まる所に立ち入らないこと
3. 人の集まる場所（電車、汽車）などの中では「呼吸保護器（レスピシーター又はガーゼマスクともいう）」を掛け、なければ鼻、口をハンカチ、手拭などで軽く覆うこと
4. 度々うがいをすること、寝る前には必ずうがいを忘れないこと

などが記されている。

12 月頃まではまだそれほどの流行ではなかったようだが、年を越した大正９年１月からは少しずつ流行性感冒の記事が増え始め、その予防として前年の流行の際には報じられなかったマスクについての記事が興味深い。マスク需要の増加に伴い品切れが続出し、自作しようとしてマスクの材料が不足している様子も、近年の新型コロナウイルス感染症によるものと同じ現象である【記事 17】。

流行性感冒の予防のため、マスクのほかに有効な手段としてワクチン接種も各地で始まった。松江においては、市役所が入手した約 100 名分では全く足りず、灘町の衛生組合が自身の事業として東京北里伝染病研究所から 800 名分のワクチンを購入している【記事 21】。

こうして松江を襲った二度目の流行は２月をピークに徐々に終息を見せたものの、その影響は甚だしく、特に死亡者の多さはチフスや赤痢をはるかに上回るものであったと伝える【記事 22】。

また、翌シーズンとなる大正９年の 12 月には、流行の兆しはまだないものの、前年・前々年の教訓を踏まえて予防を呼びかける記事が増えている【記事 23・24】。

この後は「山陰新聞」の記事が確認できず、この年の松江に於ける流行の様相が判然とはしないが、隣の鳥取県における新聞記事を参照すると、12 月 22 日の「因伯時報」に「本年県下の流行感冒初発以来 39 名現在患者は８名」（鳥取県流行性感冒（スペイン風邪）新聞記事データベース参照、注２）とあり、少なからずも患者が発生している。

ここまで見てきたように、松江地域における流行性感冒（スペイン風邪）は大正７年から９年にかけて複数回流行した。初年度は大正７年 10 月に始まり、11 月にピークを迎え、当時の松江市内人口の約６割が罹患するという大流行をもたらした。この時には学校の休校や店舗・会社の休業や事業の停止が相次ぎ、市民生活にも甚大な被害をもたらした。

翌シーズンとなる大正８年は年末までそれほどの流行は見られなかったものの、年明けの大正９年１月から再び大流行が始まり、２月にピークを迎えた。この際には「マスクの励行」、「ワクチン接種」など、新たな予防策も積極的に取られている。この大流行の教訓を生かし、その後のシーズンでもたかが風邪と油断しないようにと意識付けられている様子がうかがえる。およそ 100 年前の松江の人々も、現代の私たちが行っているような対策を取りながら、未知の感染症と戦っていたのである。

（松江市歴史まちづくり部史料調査課主任／小山祥子／2021 年４月 28 日記）

（注１）速水融『日本を襲ったスペインインフルエンザ：人類とウイルスの第一次世界戦争』藤原書店 2006 年

（注２）鳥取県流行性感冒（スペイン風邪）新聞記事データベース http://db.pref.tottori.jp/spanishcold_newspaperarticle.nsf